

— 安全・安心売れる米づくり —

(信頼される産地づくりの構築)

近年、異常気象の影響やカメムシ被害により品質は大きく低下している。

また、風評被害もあり米の安全・安心の確保が強く求められている。

品質向上を第一に、近年の高温傾向などの気象変動に耐える稲作を推進するため、5月10日以降の田植え・登熟期の稲体の活力維持・病虫害防除などの技術対策の徹底を図るとともに、エコファーマーの導入・トレーサビリティ・ポジティブリスト・食品安全GAPなどの対策を講じ、「環境にやさしく美味しい・安全・安心」な一歩先行くテラル産米づくりを実践する。

1. 高品質・良食味な米づくり

(1) 土づくり

- ・ 堆肥や土づくり資材等の施用による元気な稲体づくり
- ・ 深耕による根圏の拡大

(2) 苗づくり…… (高温登熟の回避)

- ・ 5月10日～15日を中心とした田植
- ・ 4月20日以降の播種と育苗管理 (中苗は4月10日)

(3) 根づくり…… (過剰生育の抑制と根の活力維持)

- ・ 必要茎数確保後の適期溝切り・中干しと、中干し後の間断通水の徹底
- ・ 生育に応じた穂肥施用 (時期・量)
- ・ 出穂期から20日間程度の十分な湿潤状態の確保

(4) 病虫害防除の徹底

- ・ 斑点米カメムシ類の適期防除の徹底 (量・時間帯)
- ・ 多発地帯におけるカメムシ追加防除の実施
- ・ 近年発生が目立つ紋枯れ病、イナゴの防除の実施

(5) コシヒカリのエコファーマーを推進

- ・ より安心なテラル米 (福井米) へのレベルアップ
- ・ 25年産米を目標にJA出荷農家全てエコファーマーの導入

《目 標》

① 整粒歩合	80%以上 (乳白米 5%以下・胴割米 0%・斑点米 0%)
② 千粒重	21.5グラム以上 (コシヒカリ)
③ 食味値	80以上 (コシヒカリ)
④ 玄米タンパク	6.3%
⑤ 玄米白度	20以上
⑥ 玄米水分	14.5～15.0%

売れる米づくり対策

消費者ニーズの高いテラル産米のレベルアップ

〈水稻重点技術対策〉

推進対策	重点技術対策
1 適期播種と適期・適正田植え	<ul style="list-style-type: none"> (1) 適期田植え（5月10日以降）に合わせた健苗育成の徹底（稚苗4月20日・中苗4月10日以降の播種） (2) 移植適期の健全な苗づくり（稚苗：2.2葉、中苗：3.5葉） (3) 育苗センター等の苗配布日の調整（コシヒカリは5月10日以降に硬化苗配布）
2 大粒化対策	<ul style="list-style-type: none"> (1) 適正な穂数の確保（細植え励行） (2) 一括肥料施用圃場の適正な水管理の励行と、穂肥2回目時期に必要な応じ施肥（極端な葉色落ち圃場等） (3) 登熟期間の適正管理の徹底（湿潤状態の維持） (4) 土壌タイプに応じた土づくりの実践
3 カメムシ斑点米の防止	<ul style="list-style-type: none"> (1) 発生予察を強化し、発生状況に即した適期防除の徹底 (2) 地域一斉草刈を推進 (3) 穂揃え期と傾穂期の2回防除の徹底と、ハナエチゼン及び多発地帯におけるカメムシ防除剤の追加実施
4 後期栄養の維持と適期収穫	<ul style="list-style-type: none"> (1) 生育量に応じた穂肥の適期・適量施用（適正穂数 400本/m²） (2) 高温条件下での刈り遅れ防止と、機械能力に見合う計画的な適期収穫 (3) 仕上げ玄米水分 14.5～15%の徹底
5 胴割れ米の発生防止	<ul style="list-style-type: none"> (1) フェーン現象時の湛水管理 (2) 籾水分測定による適期刈取りと適正乾燥 (3) 登熟期間の間断通水の徹底による千粒重の増加 (4) 被害圃場の仕分け
6 土づくりの実践	<ul style="list-style-type: none"> (1) 稲ワラ有効利用のために秋起し (2) 15cm以上深耕による根圏の確保 堆肥や、土づくり資材等の施用による、元気な稲体づくり
7 安全、安心の確立	<ul style="list-style-type: none"> (1) 農薬安全使用基準の厳守 (2) エコファーマーの導入 (3) 生産資材の統一 (4) 栽培記帳100%の実施 トレーサビリティ（追跡可能性）の確立 (5) ポジティブリストと食品安全GAPの遵守 (6) 漏生籾対策（直播栽培）
8 低コスト生産の確立	<ul style="list-style-type: none"> (1) コシヒカリ直播栽培の普及拡大 (2) 液剤防除の活用 (3) 大型規格農薬の利用